

研究成果の公開——最近開催されたシンポジウムから

共同研究「パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点」

シンポジウム

「イスラエル建国以前のパレスチナをめぐるナショナリズムの諸相」

日時：2015年3月13日(金)
場所：東京大学東洋文化研究所
主催：国立民族学博物館
協力：NIHUプログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点パレスチナ研究会
企画：菅瀬晶子(国立民族学博物館)

オスロ合意に基づく和平プロセスの頓挫後、パレスチナ／イスラエルをめぐる状況は膠着状態に陥り、状況を改善する糸口はまったくみえない。このような現状が生じている背景には、現地の人びとの声があまりに無視され続けてきたという事実がある。パレスチナ／イスラエル研究もまた、欧米的言説に支配されてきた。今後の展望を見据えるためにも、現在の状況の根源が生じた、19世紀後半からイスラエル建国前夜の時代において、パレスチナ／イスラエルがいかなる状態に置かれていたのかを再検討する必要がある。

本シンポジウムにおいては、その時代に育まれたパレスチナとアラブのナショナリズム、そしてシオニズム、それぞれのありかたを、当事者たちの記録や証言をもとに再考した。NIHUイスラーム地域研究との共催という形式をとったことで、共同研究「パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点」のメンバー以外のパレスチナ研究者、シオニズム研究者とも研究成果を共有し、議論を重ねることができた。パレスチナ／イスラエル再考のためのひとつの契機となった。

みんなく公開講演会
「いやし旅のウラ？表？
——現代アジアツーリズム」

日時：2015年3月20日(金)
場所：オーバルホール
主催：国立民族学博物館・毎日新聞社

近年流行している「ケア」や「癒やし」を目的とした日本からアジア諸国へのツーリズムに焦点をあて、日本とアジアとの関係の変化について考えた。



まず松尾瑞穂(民博)が、インドのメディカル・ツーリズム(健康増進や病気治療を目的とする旅)について講演した。インドでは、ヨーガに代表される伝統医療から代理出産のような先端医療まで幅広いメディカル・ツーリズムがみられ、新たな産業となっている。人びとはインドに何を求め、それは社会をどう変えるのか、現地の視点から考察した。

次に小野真由美(岡山大学)が、老後のライフスタイルとして注目を集めているロングステイ・ツーリズムについて話をした。これは暮らすように旅する、あるいは旅するように暮らす海外長期滞在型余暇であり、日本人高齢者にはマレーシアが人気である。その理由と実態や、マレーシアの変容について検討した。

講演とディスカッションを通じ、日本社会の変化により従来は家族や地域で完結していた「ケア」が国際化しており、そのサービスの需要と供給が日本とアジア諸国の経済関係を反映している現状が明らかとなった。

フォーラム型情報ミュージアム・開発型プロジェクト「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」

国際ワークショップ

「資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討」

日時：2015年4月16日(木)～17日(金)
場所：国立民族学博物館
主催：国立民族学博物館、科研費若手研究(A)
企画：伊藤敦規(国立民族学博物館)

昨年10月の国際ワークショップ(「資料熟覧——方法論および博物館とソースコミュニティ(SC)にとっての有効活用を探る」)の議論を踏まえ、再び米国先住民ホピを招聘し、民博が所蔵する木彫人形資料の熟覧とその映像による記録化を行った。本プロジェクトでは、SCによる資料熟覧の実施を民博だけではなく他機関でも予定している。そのため今回のワークショップでは、他機関へのSCの派遣もしくは他機関によるSCの招聘を具体的に想定しながら、熟覧実施とその記録に関する注意点などをプロセスごとに確認して議論を行った。また、従来のように文化人類学者が移動するフィールド調査と、SCの人々を移動させる熟覧調査との相違点を検討することで、文化人類学的調査の手法やドキュメンテーションの方法論を議論した。ワークショップには、上記のホピの人々に加え、北海道白老のアイヌ民族博物館、天理大学天理参考館、野外民族博物館リトルワールド、北海道大学アイヌ・先住民研究センターが参加した。



本館3階スタジオで資料熟覧の様子。